



日本地球化学会ニュース

No. 193 June 2008

Contents

2008年度日本地球化学会年会のお知らせ(2).....	2
学会からのお知らせ.....	4
第3回日本地球化学会ショートコースのお知らせ	
Geochemical Journal 編集委員長から	
日本地球惑星科学連合2008年大会報告	
学会評議員会議事録.....	5
2007年度第4回	
研究会報告.....	6
SOLAS Summer School に参加して	
新連載「地球化学の現場」No. 1	7
九電産業株式会社 環境部分析センター 能登 征美	
訃報	
講演要旨作成上の注意.....	11

2008年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会，日本鉱物科学会，日本地質学会

会期：平成20年9月17日(水)～19日(金)

会場：東京大学教養学部12号館，13号館

東京都目黒区駒場3-8-1

京王井の頭線「駒場東大前」下車（急行は停車しませんのでご注意ください）

年会 web page: <http://db1.wdc-jp.com/geochem2008/>

内容：口頭発表及びポスター発表（今回は初めての試みとして，すべての発表を30程度のセッションの中で行います），夜間小集会，学会賞記念講演，総会，懇親会

若手優秀ポスター賞：きわめて優れたポスター発表を行った日本地球化学会学生会員に授与します（受賞者発表は懇親会の際に行います）。

セッションテーマ：このお知らせの最後にまとめて示しますのでご覧ください。講演申込に際しては，必ずセッションを一つ指定してください。

講演申込，講演要旨原稿受付：6月9日(月) 14時受付開始。7月14日(月) 14時締切。年会 web page からのみ受け付けます。今回は講演申込と要旨原稿受付を同時に行います。要旨原稿の提出を行わないと講演申込は完了しません。講演要旨の書き方は，上記 web page，もしくは，本ニュース末尾ページをご参照ください。また web page からの申込が困難な場合は，下記の問い合わせ先に締切の1週間前までにご連絡ください。なお，投稿する要旨の原稿は締め切り日までは修正可能ですが，締め切り日を過ぎたあとは一切修正できず，そのまま J-STAGE でも公開されます。

参加予約申込：6月9日(月) 14時受付開始。8月29日(金) 14時締切。年会 web page から，指示に従って申し込んでください。

プログラムの公表：プログラムは8月1日頃に年会 web page 上に公開します。今回は事前に要旨集の配送を行いませんので，プログラムの確認はこの web page で行ってください。8月末頃に配布される地球化学会ニュースにもプログラムを掲載します。なお，講演要旨は8月末に J-STAGE 上で公開されます。

参加登録費（講演要旨集1部含む）：

予約：一般会員 5,000円，学生会員 3,000円，

会員外 7,000円，会員外学生 4,000円

当日：一般会員 6,000円，学生会員 4,000円，

会員外 8,000円，会員外学生 5,000円

*会員は日本地球化学会及び共催学会の会員を指します。当日受付で会員申込された方も会員扱いとします。

懇親会：9月18日学会賞等受賞講演終了後，生協食堂にて行います。

予約 5,000円（学生 3,000円），当日 6,000円（学生 4,000円）

講演要旨集：3,000円／部（当日手渡し）（後日郵送の場合は3,500円／部）。

予約による参加登録費・懇親会会費・講演要旨集代金の支払い：これらのお支払いは，年会 web page から，クレジットカードによるオンライン決済でお願いいたします。なお，各種の支払いは代理で行うことも可能です。クレジットカードによるお支払いが困難な場合は，年会事務局に締切の1週間前までにお問い合わせください。年会当日の参加登録費のお支払いは現金となります。領収書を必要とする場合は，年会当日に受付にお申し出ください。

併設展示：関連機器メーカーその他による展示会を併設する予定です。詳細については年会事務局にお問い合わせください。

小集会：学会の期間中の昼食時間，あるいは講演終了後に小集会を行うことができます。希望のあるグループは年会事務局にお問い合わせください。

セッションテーマとコンピーナー（アンダーラインのあるコンピーナーが責任者）：各セッションの概要については，年会 web page をご覧ください。

- 01 地球外物質の宇宙化学：先太陽系史から初期太陽系史
伊藤正一，坂本久義（北大），橋省吾（東大），日高洋（広大）
- 02 月，火星，太陽系小天体の起源と進化
三浦弥生（東大），橋爪光（阪大）
- 03 新しいサンプルリターン時代の分析法・体制とその成果
土山明（阪大），海老原充（首都大），富岡尚敬（岡大）
- 04 地球内システムの共進化
中井俊一，橋省吾（東大），上野雄一郎（東工大）
- 05 マントル物質の化学とダイナミクス

- 下田玄 (産総研), 小木曾哲 (京大), 清水健二, 鈴木勝彦 (JAMSTEC)
- 06 コア-マントル間の物質相互作用
平田岳史, 河合研志 (東工大), 小木曾哲 (京大)
- 07 揮発性成分を理解することで地球内部の現象がよりよくわかる
松本拓也 (岡大), 角野浩史 (東大), 川本竜彦 (京大)
- 08 火山ガス・火山性流体の挙動, 火山活動のモニタリング
大場武 (東工大), 北逸郎 (九大), 森俊哉 (東大), 野上健治 (東工大)
- 09 島弧・海嶺衝突帯の火成作用とテクトニクス
安間了 (筑波大), 折橋裕二 (東大), 新正裕尚 (東京経済大), 平田大二 (神奈川県立生命の星・地球博物館), 黒澤正紀 (筑波大)
- 10 地震発生素過程, 断層帯・活断層の化学, 地震活動に関連した化学観測
田中秀実, 角森史昭 (東大)
- 11 古気候・古環境解析の地球化学
中塚武 (北大), 原田尚美 (JAMSTEC), 入野智久, 渡邊剛 (北大)
- 12 堆積物, 堆積岩の地球化学
山本鋼志, 杉谷健一郎, 三村耕一 (名大), 加藤泰浩 (東大), 丸岡照幸 (筑波大)
- 13 同位体で見る地球表層環境変動
鈴木勝彦, 黒田潤一郎 (JAMSTEC), 西澤学 (東工大), 山口耕生 (JAMSTEC)
- 14 陸と海の熱水循環システムの地球化学
石橋純一郎 (九大)・千葉仁 (岡山大)
- 15 海洋における微量元素・同位体の分布と循環
小畑元, 天川裕史 (東大), 乙坂重嘉 (原研), 熊本雄一郎 (JAMSTEC)
- 16 大気水圏とそれらの相互作用, 気候変動
野尻幸宏 (環境研), 植松光夫 (東大), 吉田尚弘 (東工大)
- 17 地球大気化学: ガス・エアロゾル
谷本浩志, 遠嶋康徳 (環境研), 柳澤文孝 (山形大), 河村公隆 (北大)
- 18 土壌・陸域生態系の物質循環
杉本敦子 (北大), 赤木右 (九大), 八木一行 (農環研), 高橋善幸 (環境研), 楊宗興 (農工大)
- 19 水圏環境地球化学
高橋嘉夫 (広大), 福士圭介 (金沢大), 松尾基之 (東大)
- 20 有機地球化学
奈良岡浩 (九大), 高野淑識 (JAMSTEC)
- 21 地球外および海底系熱水系有機物と生命の起源
小林憲正 (横国大), 三田肇 (福岡工大), 鈴木勝彦 (JAMSTEC)
- 22 バイオミネラルゼーションと石灰化—遺伝子から地球環境まで
佐野有司, 川幡穂高 (東大)
- 23 ナノジオケミストリー: 鉱物表面・界面, 地球化学プロセスの基礎科学
宇都宮聡 (九大), 太田充恒 (産総研), 鍵裕之 (東大)
- 24 重元素を用いた安定同位体地球化学
谷水雅治 (JAMSTEC), 平田岳史 (東工大)
- 25 新しい分析技術の開発とその応用
横山哲也, 平田岳史 (東工大), 岩森光 (東大)
- 26 加速器質量分析が拓く地球環境学・年代学・考古学
南雅代, 北川浩之 (名大), 横山祐典, 松崎浩之 (東大)
- 27 都市環境の地球化学と人間—社会相互作用
益田晴恵 (大阪市大), 丸茂克美 (産総研)
- 28 放射性廃棄物と地球化学
日高洋 (広大), 吉田英一, 山本鋼志 (名大)
- 29 地球化学教育の現状と今後の課題, 地球化学者のキャリアパス
瀧上豊 (関東学園大), 橘省吾 (東大), 津野宏 (横国大)
- (セッション01から29までに入らない発表は, 以下の4つのセッションで受け付けます)
- 101 宇宙惑星化学 (全般)
- 102 固体地球化学 (全般)
- 103 生物圏地球化学 (全般)
- 104 大気水圏地球化学 (全般)
- 年会事務局:
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科 地殻化学実験施設内
Fax: 03-5841-4119
e-mail: gj2008-help@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

学会からのお知らせ

●第3回日本地球化学会ショートコースのお知らせ

主旨：地球化学は、試料を構成する元素、同位体、化学種の存在度、分布、移動、変化を空間的・時間的に調べ、それらを支配する法則や原理を見いだすことにより、地球や惑星を構成する物質の構造や循環を調べる学問である。分析・データ解析技術の進歩により、試料から得られる地球化学的知見の質と量は飛躍的に向上し、今では、鉱物学、岩石学、地質学、地球物理学など、他の地球科学分野の発展を支える重要な学問となっている。しかしその一方で、地球化学の応用性・実用性のみが注目され、地球化学の本質である現象の素過程を調べる研究が少なくなるとともに、時間をかけてじっくり調べ、問題点を徹底的に掘り下げて理解する機会も減少するという問題も顕在化している。こうした問題に対し、日本地球化学会では地球化学講座の発行を通じて地球化学の啓蒙を進めてきた。そして日本地球化学会では、次なる啓蒙活動として、大学生・大学院生を対象とした「ショートコース」を、年会日程（平成20年9月17, 18, 19日）に合わせ、9月16日に開催する。本ショートコースでは、地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と、最先端研究に触れることによる視点の拡大、という次の二つの目標を掲げ、将来の地球化学を担う若手研究者の育成を目指す。

プログラム：

はじめに（9：30～）平田岳史（東工大院）

「Inquisitiveness and Chastity in Science」

講義1（9：40～）

吉岡正和（高エネルギー加速器研究機構）

「加速器づくりと地球科学」

講義2（11：00～）横山祐典（東大地惑）

「加速器質量分析とTIMSによって明かされる地球環境変動」

昼食（12：20～）

講義3（13：20～）横山哲也（東工大地惑）

「太陽系形成初期の同位体不均一と元素合成」

講義4（14：40～）上野雄一郎（東工大）

「硫黄同位体からみる古環境」

講義5（16：00～）横山広美（東大理）

「研究者と科学コミュニケーション」

Closing（17：45～18：00）

定員・申込締切：50名（先着順）。9月5日(金)を参加申込締切日としますが、定員になり次第参加申し込みを締め切らせて頂きます。主として本学会の学生会員を対象としますが、特にこだわりませんので非会員あるいは年配の方も参加可能です。

参加費：3,000円（講師謝金費、資料代、弁当代等を含む）。当日受付でお支払い頂きます。日本地球化学会の学生会員は学会からの補助により2,000円引とします。

申込み方法：申し込み用紙（エクセルファイル）をweb pageよりダウンロードし、必要事項を記入の上、ショートコース申し込みアドレス“shortcourse2008@geo.titech.ac.jp”までお送り下さい。なおメールの件名には「2008年ショートコース申込」と明記下さい。

（行事幹事・平田岳史）

●Geochemical Journal 編集委員長から

Express LettersはGeochemical Journal誌に新たに加わったカテゴリーの論文です。刷り上がりで4ページの短い論文ですが、投稿から4ヶ月以内にウェブページに掲載される速報性があります。また、すべての読者がインターネット上で、無料でダウンロードできるため他の論文で引用される可能性が高まります。さらにすべての図と表がウェブページ上で、カラーで掲載されます。このように様々な特典がありますので、地球化学会の会員の方々の多数の投稿を希望します。

また、今年よりGeochemical Journal誌の論文賞（The Geochemical Journal Award）の副賞が10万円から33万円に増額されました。本賞は前年度にGeochemical Journal誌に掲載されたすべてのカテゴリーの論文の中で、編集委員の投票により最優秀の評価を受けたものです。繰り返しになりますが、地球化学会の会員の方々の多数の投稿を希望します。

（Geochemical Journal 編集委員長・佐野有司）

●日本地球惑星科学連合2008年大会報告

日本地球惑星科学連合2008年大会が5月25日から30日の日程で、幕張メッセで開催されました。日本地球化学会は「固体地球化学・惑星化学」（レギュラー）、「非質量依存同位体効果：新しい同位体地球化学に向けて」（スペシャル）のセッションを主催し、また、「大気化学」（レギュラー）、「水循環・水環境」（レ

ギュラー),「火山の熱水系」(レギュラー)のセッションを共催し,各セッションでは活発な議論が行われました。

地球化学会の展示ブースでは,広報委員,評議員がほぼ常駐する形で運営され,通りかかる人には,新しく改訂した学会のパンフレットを積極的に配ると共に,特に学生会員勧誘のための学生パックや,学会の前日に行われる第3回ショートコース,地球化学会年会の宣伝を行いました。テラ出版のご厚意で,学会誌 *Geochemical Journal* の無料配布,論文ファイルの入ったCDの無料配布も行うことができ,特に持ち帰りに便利なCDは多くの方に配ることができました。これが同誌への投稿数増加につながることを期待します。また,第7巻まで刊行された「地球化学講座」の著者割引での販売もブースにおいて行いました。

来年も連合大会にてブースを開く予定ですが,非学会員の方にも地球化学会をよりよく知っていただくために,また,連合大会に参加する学会員の拠点としても機能することを願っています。展示ブースについてご意見,ご提案がありましたら,広報幹事(news-hp@geochem.jp)までお知らせください。

(広報幹事・鈴木勝彦)



学会ブースの一コマ

学会評議員会議事録

●2007年度第4回(新旧評議員引継ぎ)

日時:2007年9月21日 13:00~13:30

場所:岡山大学 一般教育B棟B209号室

出席者:松田准一会長,蒲生俊敬副会長,天川裕史,岩森光,植田千秋,小畑元,千葉仁,角皆潤,中井俊一,日高洋,平田岳史,益田晴恵,南雅代,山本鋼志(以上現評議員),佐野有司,鈴木勝彦,松本拓也,野尻幸宏,三村耕一,奈良岡浩,中塚武(以上次期評議員)

1. 2004~2005年度評議員会からの申し送り事項への対応

松田会長から,前評議員会からの申し送り事項とそれに対する対応について説明があった。

2. 2008~2009年度評議員会への申し送り事項

1) 地球化学が主導する学術活動(いくつかの分野での科学研究費など)の立ち上げを実際に実行してほしい。

2) *Geochemical Society* などに対し, Council 選挙のときには,日本地球化学会からも候補者をたてるなど,積極的な参入を是非してほしい。

3) *Goldschmidt* 会議での GJ 賞の授賞式は継続してほしい。そのために次期開催地の委員会と密接に連絡をとること,また *Goldschmidt* 会議での日本地球化学会の PR (ブース展示など) を積極的に行ってほしい。また, *Goldschmidt* 会議でのセッションの提案も積極的に行ってほしい。

4) アジアにおける地球化学の連携を是非推進してほしい。

5) 年会開催時のルール(学会として決めてある事項, LOC が決めて行う事項, など)の確立を行ってほしい。

6) GJ の完全電子化に向けた準備をしてほしい。

7) 地球化学の年発行回数について検討してほしい。

8) 評議員の選挙方式について,地域ブロック制の是非を含め再検討してほしい。

9) 会員の増強について,終身会員の創設なども含めさらに検討してほしい。また,年会参加費の割引などもふくめ,会員であることのメリットを十分明確にしてほしい。

10) ホームページ上での質問応答,プレス発表なども含め,社会への PR も積極的に行ってほしい。

- 11) 会費未納者の取り扱いについて、しっかりしたルールを確立してほしい。
- 12) 名簿発行の是非について検討してほしい。
- 13) 地球化学講座の全巻完成をめざしてほしい。



研究会報告

SOLAS Summer School に参加して

国立環境研究所地球環境研究センター

NIES ポスドクフェロー

亀山宗彦

日本国内にいる学生やポスドクのような若手の研究者にとって、各国の同世代の研究者と交流できる機会は国際学会などに限られており、自分を各国の研究者と客観的にじっくりと比較できるような機会はそれほど多くない。そのような中、私は幸運にも国際プロジェクト SOLAS (Surface Ocean-Lower Atmosphere Study) のサマースクールに参加するという形で「世界の風」を感じることができた。本サマースクールでの経験は大変有意義なものであり、今後の研究活動において大きな糧になるであろう。今回はこのサマースクールの特徴や雰囲気やサマースクールを通じて得ることができた経験について報告する。この報告を受けて、2009年に開催予定の次回サマースクールに多くの日本人の若手研究者が参加すること、また日本でもこのような国際経験を通じて若手研究者を育成するような取り組みが今よりも盛んにおこなわれることを希望する。

今回の SOLAS サマースクールは2007年10/22～11/3の全12日間の日程で、フランス・コルシカ島 (Cargèse) で開催された。このサマースクールは2003、2005年に続き、今回で第3回目であった。過去2回の日本人参加者の数人とは面識があり、皆が口をそろえて「素晴らしかった」「是非行くべきだ」と各々がサマースクールで得た経験について熱弁する様子から、これは自分も参加しなくては、と参加を申請するに至った。定員をはるかに超える申請が毎回あり(定員の3倍だとか!)書類による選考があるのだが、私はこの書類審査を運よく通過し、晴れてサマー

スクールに参加できる運びとなった。今回のサマースクールでは世界20ヶ国から68人が“Student”として参加し、日本からは私を含め3人(堀川恵司氏(高知大海洋コア, PD), 下重光次氏(岡山大, M1))が参加した。

このサマースクールでは大きく分けて3つの取り組みがなされた。一つ目は SOLAS に参加する各国の研究者による講義である。この講義は「海洋生物」、「海洋物理」、「温室効果ガス」、「気候変化」、「鉄サイクル」、「大気海洋間のガス交換」、「リモートセンシング」、「エアロゾル」、「炭素サイクル」など、大気—海洋間の領域研究に関連する幅広い内容で約30コマおこなわれた。この講義は全てベーシックなところから最新の研究結果まで、バランスよく網羅されていた。参加者は皆熱心にこの講義に聞き入っており、講義中に多くの質問が飛び交い白熱した議論がされるあまり、予定の時間を大幅に遅れることがしばしばあった。さらに特筆すべきはこれらの純粋な科学の講義に加え、「IPCCの取り組み」、「論文投稿」、「プロポーザルの書き方」、「科学者と報道」といった、普段の抗議では聞くことがあまりできない内容の特別講義も取り入れられていたことである。この特別講義を通じ、アイデアの発案から社会貢献、報道までの一連の研究に関係するプロセスを学ぶことができた。

二つ目は様々な研究手法に触れる実習である。それぞれの実習で10人弱のグループを作り、「Oral Writing」、「モデルリング」、「海洋観測」、「ラボワーク」、「大気化学測定」、「ガス交換測定」の全6つの実習をおこなった。参加者の研究分野が様々であるため、各実習で専門に近い人が慣れない人の手助けを進んでするなど、やはり実習でも積極的な姿勢が多く見られた。海洋観測の実習ではグループ分けの関係上、同じグループになった同士は一日行動を共にするため研究以外でも交流を深めることができた。

そして三つ目の取り組みは参加者によるプレゼンテーションである。参加者全員にはポスター発表、1分、4分の口頭発表が義務付けられていた。1週目にポスター発表とそれに関する1分の口頭発表、2週目に4分の口頭発表の場が設けられた。1週目の週末におこなわれた「Oral Writing」の実習では、グループ内で口頭発表の練習をおこない、講師から発表の姿勢やスライドの作り方などの意見をもらうことができた。大変驚いたのは、実際の4分間の口頭発表では多くの参加者のプレゼンテーションが「Oral Writing」



海洋実習を終えての記念撮影

の実習時に比べ非常によく修正され、大変見やすいスライドかつ理解しやすい発表内容になっていたことであり、同世代の参加者の研究に対する熱意を感じた。

そして、このサマースクールを通じて最も有意義だったことは、日々の生活（共同生活やパーティ）において各国の同世代の参加者との交流ができたことではないだろうか。時にはそれぞれの研究に対して議論を交わしたり、時には休み時間に卓球をしたりビーチに行ったり、時にはワインを飲みながらダンスをしたり。なるほど、過去の参加者がお勧めしていたのも納得であった。彼らとは今後も様々な国際学会で出会い意見交換するであろうし、将来共同研究をする機会もあるかもしれない。今回コネクションを持つことができた同世代の研究者同士でそれぞれを意識し合い、追いつけ追い越せと国境を越えて日々切磋琢磨することで、今後国際的にクオリティの高い研究が発展していかうと信じてやまない。

最後に、特定領域研究 W-PASS において、参加登録費・渡航費・滞在費等を快くご支援下さった領域代表者である植松光夫教授（東大海洋研）に感謝致します。



地球化学の現場 No. 1

九電産業株式会社環境部分析センター

能登征美

(<http://www.kyudensangyo.co.jp>)

地球化学会ニュースの連載コーナーとして、ご存知のように、「大学院生による研究室紹介」と「女性研究者に聞く」の2本が走っております（今号では諸般の事情により研究室紹介については休載とさせていただきます）。前任者からぜひ新連載をとすすめられ、新しいインタビュー記事を始めることにしました。

新連載は「地球化学の現場」と題して、いわゆるアカデミックポスト以外でご活躍されている地球化学会会員（あるいは学会に関係の深い方）に執筆をお願いします。ご自身の経歴を踏まえての学生会員へのアドバイス、普段の業務を通じての学会への社会連携活動の提言、といったお話を伺うことで、現在の学会運営体制の中で見失いがちな問題やその解決策をお聞きすることができるのではと考えました。

第一回目はまずご近所から、ということで編集担当

者が普段からお世話になっております九電産業株式会社の能登さんをお願いすることにいたしました。連載の主旨からも、なるべく幅広い分野の方（例えば行政職・博物館・メーカー・コーディネーターなど）にインタビューをお願いできればと考えております。自薦・他薦の名乗りをあげていただける方をお待ちしておりますので、情報をニュース幹事までお寄せください。

「今のお仕事の内容を簡単にご説明ください」

九電産業(株)環境部分析センターで、同位体分析の実務（前処理・測定、お客様対応、報告書作成等）と同位体分析を使った測定技術に関する研究を担当しています。従来、地熱関係を主体に無機物の同位体を扱っていたのですが、最近では同位体の応用範囲も広がり、有機物も含めこれまで経験したことのない物質や項目に関するお問い合わせが増えていきます。

「よろしければ、今のキャリアを選んだ経緯をお話ください」

博士課程の最後の年に国家公務員試験に合格し、研究職を探していたのですがなかなか決まらずにいました。そんな時、現在の会社が地熱資源調査で安定同位体分析を受託しており、翌年度から軽元素安定同位体比質量分析計を購入して測定を始めるということで声を掛けてもらいました。

私は、富山大学理学部地球科学科の4年生から岡山大学大学院（鳥取県三朝町の岡山大学固体地球研究センター、現：岡山大学地球物質科学研究センター）在学中まで軽元素安定同位体比分析に携わってきました。研究職ではありませんでしたが学生時代の経験が活かせるならと、就職を決めました。入社した年に入った質量分析計（VG製SIRA 10）は今でも現役です。

学生時代に経験したのは、ケイ酸塩鉱物・炭酸塩鉱物・水の酸素同位体比分析などでした。九電産業(株)に入社してからは、対象も地熱・温泉水の試料を始めとして、溶液、ガス、鉱物・岩石・土壌など多岐に渡り、項目も水素・酸素・炭素・硫黄・窒素、ヘリウムなど希ガス、ストロンチウム・鉛・ホウ素、トリチウムなど、様々な同位体に関わるようになりました。そのため、恩師である日下部実先生、岡山大学千葉仁教授、富山大学佐竹洋教授、東工大吉田尚弘教授、東京大学長尾敬介教授、始め学生時代からの友人・知人の

方々には言い尽くせないほど本当にお世話になっていきます。

「学生時代の経験で役に立っていることは何でしょうか」

同位体分析に関してはほとんど全てのことが役立っています。軽元素の安定同位体比の測定や、測定するために試料をガス化する前処理を当時はほとんど手作業で行っていました。目的の質量数のビームがコレクターに入るように永久磁石の位置を調整したり、生データから最終的な結果を計算するプログラムを組んだりもしました。今では自動化されブラックボックスになってしまっている反応や測定の原理がよく理解できたように思います。また学部での4年生のとき、卒論で真空ラインを作成したので、ガラス細工もできるようになりました。今でも簡単なものは自分で作ったり直したりしています。

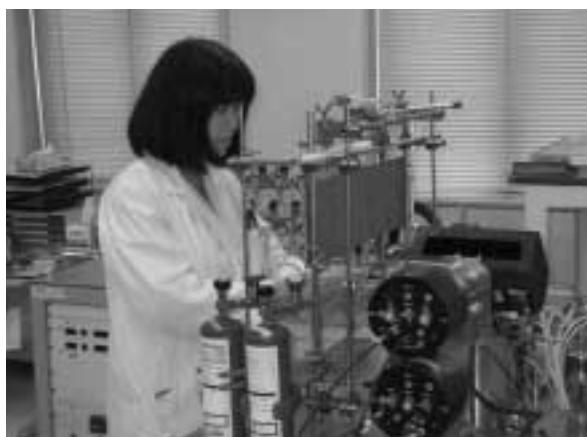
「今までのお仕事で印象に残るものがあればお話ください」

10年ほど前、石英中の流体包有物の流体の水素同位体比を測定する仕事を頂きました。まず、流体を取り出す方法を調べて特注で器具・道具を作り準備をしました。真空中で段階加熱により出てくる流体を、一旦ガラス管に封入します。ここまでは社内で、その先は三朝で行いました。ガラス管中の流体を真空ラインに入れ、ウラン炉で還元します。そして、できた水素ガスを水銀のマノメーターで定容し、圧力から流体の量を算出します。その後質量分析計で水素同位体比を測定します。

新たなシステムを立ち上げるのは困難が伴いますが、自分にとっては一番楽しくやりがいのある作業です。

「地球化学会の学会員であることのメリットは何でしょうか」

人とのつながりと情報収集でしょうか。九電産業(株)に入社してからそれまで経験したことのない対象物の同位体分析について調べるときは、まず地球化学会の年会要旨集をめくって関連する記事がないか探したものです。地球化学会年会で知り合った方も随分いらっしゃいます。また、知り合いの方に問い合わせをして、紹介して頂いた方も地球化学会の会員でいらっしゃる人が多いです。



質量分析計の分析作業をする筆者

「地球化学会の活動に期待することをお願いいたします」

同位体分析に限らず、分析値を出すまでは昔に比べ

てずっと簡単に短時間でできるようになりました。データをどのように解析したらよいかといった事例を学会や雑誌でたくさん紹介して頂けたらいいですね。

「最後に御社の業務のセールスポイントをお願いします」

九電産業株は、民間企業として九州で唯一の同位体分析機関です。長年に亘り、地熱発電所の蒸気井の挙動モニタリングおよび地熱流体の供給起源を始めとする様々な調査に携わってきました。それらの実績を活かし、的確な調査と評価を行っています。

近年は、地熱調査の経験を活用し温泉成分調査、鉛同位体分析も含めた土壌汚染調査、九州電力株式会社のグループ会社という立場で石炭灰の有効利用調査など、も手掛けています。

訃報：半田暢彦元地球化学会会長のご逝去を悼む



半田暢彦先生が2008年3月15日に逝去された。享年75歳であった。昨秋に体調を壊され入院中ではあったが、順調に回復しリハビリ中であったのに突然の訃報であった。

先生は1953年東京教育大学理学部生物学科を卒業され、1961年名古屋大学（助手）理学部水質科学研究施設に赴任され、その後1978年名古屋大学（教授）水圏科学研究所、1996年定年退官し名古屋大学名誉教授の称号を授与された。この間、先生は大学院の教育に情熱を持って当たられ、多くの人材を育てられた。理学部の研究施設から全国共同利用の大気水圏科学研究所への発展にも貢献され、1993年から2年間は大気水圏科学研究所長も務められた。名古屋大学退官後、先生は1996年愛知県立大学（教授）情報科学部に赴任され、1998年同学部長就任、2002年から2年間愛知県立大学大学院情報科学研究科創設にともない研究科長を務められた。

先生の研究内容は多岐に渡るが、名古屋大学赴任以来、一貫して流れる研究対象は、自然界における有機物の動態解明であろう。特に海洋を対象とした先生の研究成果は、日本のみならず、世界においても有機物研究の拠点を成すものであった。懸濁態及び溶存態炭水化物の研究から始まり、セジメントトラップによる有機物の鉛直輸送の研究、植物プランクトンによる有機物の生成と分解過程の解明、海洋有機物分子の構造を追求した化学的キャラクターゼーション等の研究により海洋内部における有機物

動態について多くに知見が得られた。先生は湖沼や海洋の堆積物有機物の研究にも力を注がれ、初期には堆積物有機物の初期続成作用解明が中心であったが、やがて同位体やバイオマーカーを用いた古環境復元へと広がった。

このような研究業績に対して、1982年には「海洋における炭水化物の地球化学的研究」で地球化学協会学術賞、1990年には「海洋における有機物と炭素循環に関する研究」で日本海洋学会賞を受賞されている。

先生は大学の管理運営のみならず、日本学術会議、測地学審議会、学術審議会などの専門委員として広く活躍され、学術行政にも貢献された。地球化学会での活動のみを取り上げても、評議員（1974～5年）、（1978～9年）、1982～3年（庶務幹事）、1992～3年（副会長）、そして1994年から2年間会長を務められ、本会の発展に尽力された。

以上のように先生は大学・学会の管理運営や学術行政にも熱心に取り組みましたが、身近なものにとって先生は実験を愛してやまない研究者だった。愛知県立大学を退かれた2004年からは、ほぼ毎日大学へ来て自分専用の実験台で実験されていた。実験台や分析機器を前にしての議論は楽しい時間だった。半田先生にはもう少し研究を続けて欲しかった。しかし、今はもう叶わない。無常を感じると共に先生を失った寂しさは消えるものではない。地球化学会の会員と共に、先生のこれまでのご尽力に感謝するとともにその業績をたたえ、ご冥福をお祈りする。

（田上英一郎）

講演番号記載 スペース (空欄)	講演題目 ○ 岡山桃太郎 ¹ 、瀬戸内橋子 ¹ 、晴国美星 ² (1岡山大理、 ² 津島大理)
40 mm	10 mm
講演要旨作成上の注意 1) フォントはできるだけ明朝体を使ってください。 2) 原稿は、B5 版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。 3) 枠は範囲を示しているだけです。書く必要はありません。 4) A4 用紙に上部 31 mm、下部 30 mm、左 22.5 mm、右 22.5 mm のマージンを設定してください。 5) 研究題目、発表者、ならびに所属は例示に準じて記入し、講演者の左側に○印をつけてください。講演題目などに関する英文標記についても同様です。 6) 左上の講演番号を印刷するスペースは必ず空けておいてください。 7) PDF ファイルで送るため、300 kb 程度のファイル容量で作ってください。 8) 一般講演は、要旨 1 ページ、招待講演は 2 ページまで。 9) 原稿は、プリントして正常に印刷できるかご確認の後送ってください。 10) 講演要旨の締め切りを厳守してください。	
Theme title ○ M. Okayama ¹ , K. Setouchi ¹ , B. Harekuni ² (¹ Okayama Univ. Fac. Sci., ² Tsushima Univ.)	

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2008年8月頃を予定しています。ニュース原稿は7月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

石橋純一郎

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部

地球惑星科学教室

Tel：092-642-2664／Fax：092-642-2684

E-mail：news-hp@geochem.jp

鈴木勝彦

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15

海洋研究開発機構（JAMSTEC）

地球内部変動研究センター（IFREE）

Tel：046-867-9617／Fax：046-867-9315

E-mail：news-hp@geochem.jp